

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩

「フラ・リポ・リピ」

三 谷 正

- (1) 序
- (2) 劇的独白の妙味
- (3) ルネサンスとフラ・リポ・リピ^①
 - ① ルネサンスの子リポの生い立ち
 - ② 歓楽の巷と敬虔の僧院併存のフロレンスとリポの性格
 - ③ リポの人間主義とルネサンス精神
- (4) リポの芸術論
- (5) 結 び

(1) 序

この詩の主人公 Fra Lippo Lippi の Lippo は俗名で、実名は Fra Filippo Lippi (1412—1469) と呼ばれる画家であった。フロレンス〈Florence〉の肉屋の子として生れ、赤ん坊のとき、母を失い、また、その二年後に父も亡くなり、叔母の Mona Lapacia に引きとられ、辛い目に遇うのであった。八才のとき、フロレンスのカルメル会の修道院〈Carmelite Convent〉へ叔母に連れて行かれ、無理に僧籍に入れられた。そこで絵画に対する鋭い目と資質を示し、修道院長に認められ、修道院付きの画家となった。その頃、既にカルミネ教会の礼拝堂〈The Chapel of the Carmine〉にはマサチオ〈Massaccio〉^②の絵画があった。リポはそこでマサチオの画風を習い、その画風に倣って画くようになった。やがてリポは聖アンブロジオ〈Sant Ambrogio〉修道院の尼達のために「聖母戴冠〈Coronation of the Virgin〉^③」を画き、これが傑作として有名になり、コシモ・デ・メヂチ公〈Cosimo dei Medici〉^④の保護を受ける身となった。その後フロレンスの聖ジョヴァニノ修道院〈The Convent of S. Giovanni〉の礼拝堂付き牧師〈Chaplain〉となり、更に昇進し、レグナイヤ〈Legnaia〉の聖キリコ〈Saint Quirico〉の教区牧師〈Rector〉となった。相当な収入があったが、色事に夢中になり、貧困に陥り、六十才未満でこの世を去ったと言われている。これが実在のフラ・リポ・リピの略歴である。ロバート・ブラウニング〈Robert Browning〉はこれを粉飾し、巧みに劇的独白の妙味を発揮して、“Fra Lippo Lippi” というこの劇的独白詩を創ったのである。この粉飾の際、リポの前述の先輩画家マサチオを後輩の画家としたり、また、コシモ公に認められる原因となった初期の前述の「聖母戴冠」の絵画を、リポの畢生の大作であることを強調しようとして、後年の作として引用句^⑤の示すように、リポが未だ修業中、僧院を脱出して紅灯の巷に遊び将に警手に捕われようとしたときの罪滅しの作とするなどのブラウニング独特の粉飾をしているが、この詩の中のリポの画家としての生い立ちの描写は実在のリポの幼少時代そのまま

ある。しかし粉飾された壮年期のリボはルネサンス＜Renaissance＞のフロレンス人を代表するように描かれている。当時のフロレンス人は久しきに亘るキリスト教の禁欲主義の束縛を脱し、快楽主義に向い、人間性の回復を求めるのであった。しかしフロレンスには、尚、僧院は存在し、全く宗教の影響がなくなったわけではなかった。従って修道院と歓楽の巷が併存するのであった。即ち宗教的な面と人間主義的な面が併存するのであった。けれどもリボの僧侶としての宗教的な面は偽善者的な禁欲主義者としてではなく、神の創造力を認め、人間の肉体も神の賜物であることを信じた上での肉体の快楽を認める快楽主義者であった。ここからその絵画も単に人間の魂を画くとする禁欲主義的宗教画でなく、人間の魂に血と肉を加えた生命的な絵画となったのである。

(2) 劇的独白の妙味

この詩はブラウニングの傑作の一つに数えられている。その理由は、これがブラウニング独特の劇的独白の妙味を発揮しているからである。即ち話し手が聞き手の心理を、自らの言葉で、いかに巧みに表現しているかというところにある。元来、劇的独白は一つの独り言である。しかし単なる独り言ではない。また傍白＜Aside＞のように舞台上の約束として、相手に聞えないという規定の下に、傍^{わき}を向いて独り言を言うものでもない。或は Soliloquy のように劇の冒頭に観客に向かって劇の筋を説明したり、作者の意見を述べる独り言でもない。劇的独白には話し手の前に聞き手がいて、話し手はそれに向かって語るのである。従って形の上では対話＜Dialogue＞である。無論、対話は劇の手法である。故に劇的独白も形だけで言えば劇的＜dramatic＞である。然るに劇的独白では聞き手は、ただ聞いているだけで、物を言わぬのである。故に話し手の独白＜Monologue＞である。聞き手はただ笑ったり、顔をゆがめたり、手を振ったりなど、顔の表情や手振り、身振りを示すだけで、話し手だけが物を言う手法である。結局、話し手の独り言である。ここから劇的独白＜Dramatic monologue＞というのである。そこでこの手法では、話し手が聞き手の顔色を伺いながら、その聞き手の心の動きを把え、話し手の言葉で聞き手の心理を表現する手法と言えるのである。この詩では話し手はリボ、聞き手は、のちに述べるようにフロレンスの警手である。この詩の物語は次の情景から始まる。リボは放蕩の僧で宗教生活の適性を欠くことと、当時、絵画と言えば聖者の絵即ち宗教画となっているにかかわらず、リボは宗教画ならぬ肉体美を表現する新しい型の絵を画くことを専らとするため、修道院長に宗教画を無理に画かされ、メヂチ家の館の^{やみだ}高いところにある屋根部屋に閉じ込められている。リボはこの拘束生活に堪えかね遣り切れない思いをしている。折しもかれの部屋の窓の遥か下の街路から遊女の歌声が聞え、また、その姿が窓を通して目に映る。かれは我慢ができず、敷布、掛布団を結び合せて綱梯子を作り、それを伝って街路に降り、遊女の跡を追ひ聖ローレンス＜St. Laurence＞寺院の近くでかの女らに追いつき、かの女らを相手に歓楽を尽すこと数日、ある夜、館に帰るところを市の警手^{つかま}に掴る。リボは警手にかれの振舞について弁解する。これが絶妙の劇的独白となっている。即ちリボはその弁解に当り、警手たちの表情、手振り、身振りによって、警手たちの心理を把え、警手の自らへの問いを自らの言葉によって自らが答えるといういかにも巧みな劇的独白なのである。その一例が次の句である。

「おや、拙者が御偉方の知り合いとわかれれば、手がでないとしても言うのかい。それなら、拙者の^{のど}喉のところで、もちもちさせている手をひいて、拙者をも亦、御偉方同様

にお知り置き願いたいものじゃ。

拙者が誰かってかい。そうじゃ。君(警手の隊長に就いて), 拙者は町筋三つ向うの友の家に泊っているものじゃ。その友って、どうゆうお方かって言うのかい。お偉い親方さまで、メヂチ家のコシモさまとおっしゃる方じゃ。あの角に聳えるお邸にお住居なのじゃ^④」と。これは、自らの身分を告げるにはあまりにも高慢で、コシモ・デ・メヂチ公の名を担ぎ出すいかにも嵩にかか^{かさ}る鼻持ちならぬ態度である。しかしこの態度があるにかかわらず、警手の心理を巧みに捉え、自らの言葉で手際よく警手の心理を表現している点が読者を強く引きつけるのである。次の句も読者を魅するものである。警手がリポの喉元の手を緩めると、

「なに？ 拙者は立腹などはしとらん。君の手下どもを帰えし、この四分の一フローリンを飲み代にして、拙者及び他の多くの者を匿^{かくま}い、たっぷり喰わして下さる気前のよいお邸のために祝杯をあげろ^⑤」

と言う。この句の第一行は、警手がリポを捕えたときの驚きの表情(名門メヂチ公の知合と、は知らず捕えた驚き)と、リポの立腹(メヂチ公の知合いを捕えるとはけしからんと)の表情を示した様子が躍如と表現されている。しかし二行以下は、警手を買収しようとするリポの浅ましい態度が伺われる。これについてキング<Roma J. King>は「フラ・リポ・リピについての最初の印象はわれわれには好意的な印象ではない。リポが警手に捕えられたとき、酩酊した千鳥足で、見苦しい、おどけた、ぞんざいな態度で警手を恐喝し、買収し、また、相手を騙^{だま}し、その場を抜け出そうとしていた^⑥」と言っている。このリポのなさけない態度はキングの言う通り確かに好感を持ち得ない。しかし他面では、この態度はリポのユーモラス<humorous>の性格をあらわしている。ブラウニングがリポのユーモラスな性格を駆って筆を運ぶところは、かれ独特の劇的独白の魅力があるわけである。また警手がリポの首筋を掴んでいる手を弛^{ゆる}めたとき、警手の一人の男の顔を見て、これも亦ユーモラスたっぷりにリポは言う。

「あいつは、てっきり、ユダ<Juda>じゃ。

あいつの顔はユダの顔じゃ。

ユダは丁度、あんな顔だった。

.....

拙者はあいつの顔が気に入った。

槍と提灯^{ちようちん}を持ち、仲間を戸口に押しやっているあいつの顔が気に入った。

あいつは、これ見よと言いたげに、洗礼者ヨハネ<John Baptist>の首を髪^{かみ}のところで掴み、片手でぶらさげ、もう一つの手で、血塗^{ちまみ}れの兇器^{ひつぎ}を提^ひげているあの奴隷^{あつら}としては詭^{あつら}え向きなんだ。

ところでチョークをちょっぴり持っていないか。木炭か何かでもよいんだがね。そんなもの、何かあれば、すぐにでもあいつの顔を書いて見せてやるがな。

その通りじゃ。拙者は絵書きじゃ。君たちの言う通りじゃ。何だと？ リポ僧侶の絵は到るところで見て知るととな。そして気に入っていると。そうだろうぜ。

君は仲々の目利きじゃ。実のところ、拙者には、最初から君の目付きが気に入っていたのじゃ^⑦」

と。これはリポがユーモラスな言葉のうちに聞き手警手の心理を述べると同時に、話し手リポ自らの心の奥底をも暴露したこの劇的独白中でブラウニングの最も得意とする表現の箇所である。というのは、今、リポが警手によって逮捕されるとなれば、僧侶の身として極

めて不名誉な、重大な刑罰を蒙ることとなる。事に依ると破門の憂目を見るかもしれない。この危機的瞬間に於て、これを切り抜け、刑罰を受けぬよう警手の手から逃げるため、あれやこれやと苦心するリポの心の動きが目に見えるように示されているからである。かれの種々の苦心とは、かれがカルメル修道院の僧侶であり、単なる平凡な庶民でないこと、また名門メヂチ公の知己であること、更には名声並び無きフロレンス切っの画家であることなどを誇示し、半ば恐喝的、半ば買収的な種々の手段によって、その場を切り抜け、罪を免れようとする卑しい、いかにも浅ましい根性を暴露している。故にこの劇的独白の妙味の中心は、話し手リポが聞き手警手の表情や身振りで、警手の心の動きを自らの言葉で巧みに表現すると同時に、話し手リポ自らの危機的瞬間に於ける心の奥底の動きを集中的にさらけだすところにあると言えるのである。

(3) ルネサンスとフラ・リポ・リピ

① ルネサンスの予リポの生い立ち

リポが警手に掴った際、リポが引用句⑦の言葉を発したため、警手はリポが画家であることを知るが、リポが頭を剃り、僧服を身に纏っていることが不審でならないという素振りをする。そこでリポは自らが僧侶であり、何故に僧侶になったかを説明するため、自らの生い立ちを述べる。かれは幼い頃、両親を失い、街路に放り出され、無花果の皮、西瓜の皮を拾い、掃き溜めを漁って飢を凌ぐのであった。このとき、道行く人の誰が恵みを与えるか、それともその反対に、誰がかれを蹴りとばすかと人の顔を凝視するうちに、人の顔によってその人柄を読み取る業を会得するに到ったのである。これを次のように述べる。

「拙者が巡り合った運命のように、少年が八年間、街で飢えつづけると、人の顔をじっと見るうちに、かれの切望している葡萄の房を、それが半分に切られたものであっても、誰がそれを投げしてくれるか、また、それを与えるどころか、怒鳴りつけ、いやというほど蹴り倒すのは誰かの見分けがつくようになるもんじゃ。

また、蠟燭を聖体に掲げて葬儀の行列に連なる上品な紳士の誰が蠟燭の滴りを売って金に換えるようにと目配せして、皿に落してくれるか、或は、それとは反対に、どの紳士が保安の八人衆を呼び込んで罰を喰わすか、いや、どの犬が噛みつくか、どの犬が街の掃溜で拾った骨を落してくれるか、少年の心も勤も等しく研ぎ澄まされてくるもんじゃ。

少年には、人でも犬でも何でも、その顔の見分けができるようになる。飢えの苦しみからの教えから益々見分けがつくようになるもんじゃ⑧」

と画家として人の顔を描く素地が飢えに苦しんだ頃に作られたことを話すのである。また、やがて叔母に連れられて修道院に行き、僧籍に入れられるのであるが、その際、浮世を捨てる宣誓をさせられ、浮世を捨てるという言葉でパンを捨てよと言われたと勘違いした幼い飢えた少年の哀れな心情をユーモラスに次のように言うのである。

「そこ僧院で、修道院長と叔母の間に、二言三言交渉の言葉が交わされた。その間一ヶ月振りでパンにありつき、口をもぐもぐさせていた。時刻は昼食時であった。丸々と太った神父の院長が『左様か、お前には、この惨めな浮世を捨てる決心がついたんだね。じゃ宣誓するね』と言ったのだ。拙者は切角ありついたパンを捨てるのかと思った⑨」

と無理矢理に僧侶にせられたことを述べる。僧籍に入るや、かれは書物を読まされ、ラテン語を教えられる。しかしかれは

「丁香^{じやこう}の花よ

わしにわかるラテン語は Amo われ恋すという言葉だけ[㊟]」

と小唄を口遊び、学問など見向きもしなかった。そしてただ

「拙者はノートに人の顔を描いたり、聖歌集の余白に顔の落書きをするのであった。また、Aの字や、Bの字に目鼻や顎をつけ、或は動詞や名詞のややこしい変化や活用を習う間は、一統^{ひとつづ}きの浮世の絵を描いたもんじゃ。また、手当たり次第に壁の上でも、椅子の上でも、扉にも人の顔を描いたもんじゃ[㊠]」

と、リボは聖書やラテン語の勉強よりは、人の顔を描くことに夢中になっていた。やがて修道院長はリボの絵の才能を認め、修道院付きの画家に養成することに決め、絵の修業を許するのであった。

② 歓楽の巷と敬虔の僧院併存のフロレンスとリボの性格

この詩の冒頭に次の句がある。

「憚^{はばか}りが拙者は貧相なリボという僧侶でござる。

松明^{たいまつ}などを拙僧に押しつける必要はござらぬ。

何と？ 咎^{とが}める廉^{かど}があるとな。

拙者が僧侶の分際でというのかい。

何と？ 真夜中を過ぎとるって？

君たちが見廻わっていると、遊女どもが入口の戸を少し開けて男を待つ小路の角の、ここんところで、拙者を捕えたというのかい。

拙者の寺はカルミネ修道院じゃ。そこを探して見ろよ。是非、探してみるんだね。そしてだ、君たちが、君たちの勤めの熱心を見せたいなら、そこんところでだ、男の鼠が悪い穴に入っているんだが、その相手をしようと忍び込んだちっちゃい白鼠の柔らかいのを齧^{かじ}りちゅーちゅー言っている売僧どもを引きずり出すんだね[㊡]」

と。リボは自らが僧侶であることを隠すこともせず、寧ろ堂々と僧侶であることを名乗り出る。しかも僧侶であるからとて歓楽街に足を踏み入れて何が悪いといった態度を示す。そして自らの所属する寺院がカルミネ修道院であることを明言し、そこには遊女を連れ込み、淫欲を恣^わまにする売僧もいることを告げる。これはリボが僧侶ではあるが、頑^{かたく}な禁欲主義に反対し、僧侶と雖も人間である、人間である以上、僧侶も肉の生活をする^ここと、従って今度の享楽行為は敢えて悪いことではない、それよりも、カルミネ修道院で口では禁欲主義を高言しながら蔭で淫欲に耽る偽善的僧侶こそ乱行の売僧であるとの態度を示すのである。リボのこの態度はルネサンス期のフロレンスの人々の態度を示すものである。従ってかれの置かれている環境は当時のフロレンスの社会状況を表わすのである。それは、この句の中のカルミネ修道院の名と、更にこの句に続く引用句④に見られるコシモ・デ・メヂチ公の名によって、15世紀ルネサンスのフロレンスの街が想像されるからである。そして更に想像を進めて行くと、ブラウニングの軽快な筆致の奥に、一面ではフロレンスの静かな淋しい街路、教会、修道院の庭園、メヂチ家の館、他面では噴水の響き、浮かれ騒ぐ男女の群、そしてその歌声、また一方では幻を追うように紅灯の花柳街に出入する男の姿、他方では剣と松明をもつ無愛想な警手の走り廻る情景が目^めに浮ぶのである。即ち当時のフロレンスには一面では敬虔な祈りの僧院があり、他面では快楽を求めて歓楽の巷

に歩を運び、漸く人間らしい生活に戻ろうとする人間の姿が見られるのである。要するに当時のフロレンスには禁欲主義と快楽主義、神への信仰と人間主義が併存していたと言えるのである。ジェームズ・フォサリングham <James Fortheringham> も「これらすべて（この詩の場面及びそこに起った事件）を十分に理解する鍵は、リボの置かれた状況とリボの気質である^⑧」と言い、キングも「遊女が戸を少し開けて待つ歓楽街とリボの僧院の間でかれが警手に捕われたところから、この詩は始まる。そこで歓楽街と僧院という状況とこの二つの言葉は象徴的なものである^⑨」と言っている。フォサリングhamとキングの言葉によってもルネサンス期のフロレンスの状況が、そのままリボの性格であったことが理解される。即ち宗教的性格と人間主義的性格がリボに併存していたことが理解される。しかしリボは宗教的な面を持つ男、即ち僧侶ではあったが、偽善者的な禁欲主義者ではなく、神の存在を認め、神の創造力を信じた上での人間主義者、快楽主義者であった。これを証明するのが次の句である。

「人はあまりにも多くの^{うそ}虚言を吐いて身を滅ぼす。好きすぎるほど好いていながら好いていないと言い^⑩、また、自分の思う通りに嫌いと言い切ってよいときでさえ、嫌いでたまらぬものまで、好きだと言う^⑪。拙者は教えられた通りに物を言う。拙者はエデン<Eden>の園と、そこで人間の妻をお創りになった神さまがいつも目に浮ぶのじゃ。それでじゃ。一旦覚えた人間の肉の値打ちとその味とは十分 <ten minutes> やそこいらでは忘れられぬのじゃ^⑫」

と。これはリボが虚偽を嫌い、真実を愛する正直な人間であることを示し、またかれが僧侶として神の存在を忘れず、人間が肉を楽しむことはアダム<Adam>とイブ<Eve>を創造された神の意図であり、神の恩恵であるとのリボの考えを述べた句である。従ってリボにあっては神の存在と人間の肉の生活は矛盾しないのであった。

③ リボの人間主義とルネサンス精神

然るにこの詩の前半では、次に述べるようにリボの享樂的な性格がどぎつく打ち出されているのである。既に(2)で述べたように、リボは三週間、メヂチ公の館に閉ぢ込められ、公のために「欲情を抑えるために、大きな丸い石で、^や痩せこけた^{おじい}老耄れの胸を打つジェローム^⑬」のような禁欲主義に凝り固った僧侶ジェロームの絵画^⑭及びこれに類する宗教画を、明けても暮れても無理矢理に画かされるには堪えられなかった時のことである。丁度、時は春の花の季節、かれの青春の血はうずいていた。かれの全身から僧侶は退き、人間リボが飛び出すのであった。その時の気持を

「ある暖い夕べ、聖者の絵を画いていた。すると浮世の笑い声と共に次の小唄

『桃の花よ、

死は万人にやがて来る。

生きている間が人の花』

が聞えて来た。拙者の魂はフル回転、生命の盃は生氣充滿、拙者の生命は、夢に過ぐすにはあまりに^{もったいな}勿体無い^⑮」

と言い、更にかれの部屋の窓下の街路を見下すと、そこに三人の遊女が

「えにしだの花よ、

恋を失くすりゃ、この世は墓場。

まるめろの花よ、

リーザ<Lisa>（^{イタリアのあり}ふれた女の名^⑯）に行かれりゃ、

生き甲斐も無し^㉒」

と口遊みながら月夜に跳ねる兎の品をつくり、くすくす笑っている。そして遊女の一人が顔を向けリボを見上げるのであった。リボは「チェー、肉と血、それらで出来ているのがこのわしさ^㉓」と叫び、もう禁欲の拘束生活に我慢がならず街路に飛び降り、遊女の跡を追ひ、数日間、歓楽の限りを尽すのであった。その様子を次のように言う。

「老耄れた粉挽き馬は幾年かの年期の苦役を解かれ草原に出れば^㉔、解放感の嬉しさで、硬張った蹄をあげて草原を駆け廻る^㉕。そして粉屋^㉖が草のただ一つの効用は切り藁^㉗を作ることだと教もせぬのに、せっせと草を短くする^㉘。

人は何を欲しがるか。人は草^㉙を好くのか、好かぬのか。好いてよいのか悪いのか。拙者の望みのすべては、永久不変にどちらか一つ^㉚に決めて欲しいということなんじゃ^㉛」

と。そして形振り構わず

「バラの花よ、

楽しけりゃ、誰に知られようと構やせぬ^㉜」

と歌いながら、館に帰るところを警手に捕えられるのであった。これはリボの快楽主義的性格を徹底して描いたものである。しかしこれらは敢えてリボたらずとも、ルネサンス初期の一般の人々の気持を表現するとき、この種の描写がよく行われる。宗教がその支配力を失いかけたルネサンス初期、即ち宗教によって束縛された人間が、人間性を取り戻そうとするとき、人間は、聖書、祈祷に明け暮れる禁欲主義的性格から一挙に享楽主義的性格へと、濁流が堰を切って流れるように突進して行くことは当然である。その上、人間が人間性を取り戻そうとするこの精神は一般社会のみならず、僧院にまで侵入したことは引用句の^㉝の示す通りであった。僧侶も人間である。その人間が人間らしい生活から永い間、隔離されていた反動として、僧院の中にも享楽の生活を望むものが現われるのも事の自然ではなかったか。要するに、それ迄、現実の世界を否定的に考え、神の信仰にのみ生きた人間が、現実の世界を肯定し、人間が新たに人間を発見し、その喜びに情熱を燃やしたルネサンスの人間の歓喜そのものを代表するようにリボを描くには、このように強く快楽主義的リボとして描くことは、文学の表現的手法としては極めて大切なことであった。しかしルネサンスの人間主義は必ずしも神の世界を否定するものではなかった。ただ人間の性質<human nature>に尊厳を見出したにすぎなかったのである。従ってリボは神の存在を否定したのではなく、神の認識の仕方が、教会の教理や中世紀神学と異ったにすぎなかったのである。かれは神の神秘的な力、神の創造力、神の驚異について認識力が強く、この認識の自信が深かったのである。そこからかれの生命のある芸術論が生れたのであった。

(4) リボの芸術論

リボは修道院長に絵画の才能を認められ、修道院のあらゆる処に僧侶の顔や、その他の男女の顔を画き出した。それを次のように言っている。

「先づは、最初にあらゆる種類の僧侶、黒衣(カール派の僧侶)と白衣(ドミニカン派の僧侶)の僧侶、それらの太っちょも痩せっちょも、それから教会のあらゆる人を画いた。樽の滴れ、或は、蠟燭の端くれを誤魔化した罪を告白しようと待っているお人好しの老婆から、たった今、人殺しの罪を犯したばかりの故に、息切れしている男が祭壇の下に保護されて坐

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「フラ・リポ・リビ」

っているのを、子供達を取り巻き、半ばその男の顎髭^{あごひげ}を見るために、半ばは被害者の子が、怒って右手の拳^{こぶし}を振り上げ、左手はキリストに十字を切っているその蒼白い怒りの表情を見るために、驚きながら見守っている情景を画いた[㊤]」

或は

「可哀そうな乙女が顔を隠すための頭に被^{かぶ}せた前掛けを透し、じーと眼を据^すえて前を見ながら、夕方に、爪先^{つまさき}歩きでやって来て、懺悔^{ひとこと}を一言言^いって、一つのパン、耳飾り、花束を落すのを、極悪人がぶつぶつ言いながら、それらを受取り終ると、かの女がさっさと出て行くのを画いた[㊤]」

と。更に院長の姪、犬を撫でている少年、買物に市場に出かける女などあらゆるものを画くのであった。言わば、人間の皮^{かわ}と骨^{ほね}を画くのでなく、人間の肉と血を、また、顔だけの表現でなく、物を言い且つ動く全身を、慣習的なもの、古い型のものでなく、かれの目前に横わる生々しい生活を画くのであった。ところが、その画く男女の顔、腕、脚があまりにも有りの尽の姿を写し、従来の宗教画と異なるものがあつた。修道院長はこれを見て驚き、

「これはどうしたことか、ここんところのこれは何んじゃ。とんでもないことじゃ。

絵画ちうものの的^{まと}から全く逸^それている。

ここに画いている顔、腕、脚、身体は人間の真物^{ほんもの}のそれらと全く同じじゃないか。これは悪魔のやるこっちゃ。

お前のやることは、朽ち果てる肉体ばかりを賛美して、人間を外面^{うわへ}だけで画くことではない。人間を、朽ち果てる肉体を超えた人間に向上させ、肉体を無視させ、生身といったものの存在を忘れさせることなんじゃ。

お前の仕事は人間の魂を画くことなんじゃ。人間の魂、それは火なのじゃ。煙^{ゑん}とな、そんなもんじゃない[㊤]。まあ、言ってみれば、生れたての赤ん坊のように清められた水蒸気なんじゃ。お前が赤ん坊のような清い状態で死ぬとすれば、お前の口はばった口だけが残るというもんじゃ。

それは、えーと、言葉なんか、どうでもよい。魂は魂なんじゃ。^(自分にも自分の言っていることがわからなくなってかく言う)人間の魂が画けないなら肉体なんか画かんでよい。

ここに神を崇める聖人を画いたジョット <Giotto>[㊤]の絵がある。この絵はお前に神を崇めさせると思う。なぜお前は神と共にいないのか、なぜ線や色などの不思議な力で、わしの頭から神を賛美する想いを取り去ろうとするのか。人間の魂を画け、人間の脚や腕に心惑うな。みんな消してしまえ。

ああ、あの乳房を見せている色の白い小柄の女はわしの姪そっくりじゃ。あれは、舞に行^いって男の首を刎^はせさせたヘロディアス<Herodias>[㊤]だと言いたいくらいだ。あんなものみんな消してしまえ[㊤]」

と院長は従来の宗教画を画くことを主張する。これに対し、リポは自らの考えは次のようだったと警手に説明する。

「院長の言う魂を画く最善の方法は、絵を見る人が絵の意味がわからぬときには、その絵に飽き足らぬ感を抱き、画面から目を離してしまう。それでも構わぬと思う程拙く画くことかな。だが拙者にはこう思える。

黄[㊤]の代りに全く黒[㊤]を用いると、それが白[㊤]を表わす。いかなるものも、そのささやかなそれ自身の存在[㊤]を忘れ、自らの存在は大して意味がないという謙虚な態度を

取る[㊤] ことこそ、ものの意味がはっきりしてくる。

なぜ画家は人が左足と右足を代る代る上げて進む[㊤] ように、肉体と魂が代る代る助け合うようにして肉体を魂に似るように、魂を肉体に似るように、しかも互にその位置を保つように画けぬものか。

今、拙者が最も美しい顔を画くとする。すると、それは院長の姪ごの顔となる。御本尊があまり美しいので、希望も不安も、また、喜悅も悲哀も表われていないと言うのかい。美はこれらを表現できぬと言うのかい。拙者がかの女の目 そのままに青く画き、更に一息入れて生き生きとその目を輝かせ、それから魂を吹き込むとしたら、かの女の目を三倍も美しくはできないかね。

それとも、仮に全く魂のない美があるとしてもさ、——そんなものは見たこともないが、そんなものが仮にあるとしてさ、——もし美だけを感じ、他に何も感じないとしても、人は神の発明された一番よいものを得たわけじゃ。だからそれもよいことに違いない。だがねー、更によりよいことは、神を有難く思い、その感謝をお返しするとき、人は心のうちに、今まで見失っていた魂がつかめたということなんだがね[㊤]」

と神の創造を感謝する気持になれば、それだけで既に魂がつかめるわけである故、魂だ魂だと躍起になって愚にもつかぬことを言わぬがよいと言うのである。そして自らの芸術的信念を更に次のように述べて行くのである。

「美も、不思議も、力も、ものの形、色、明暗、変化、驚異などのすべては、神の創りしものである。何のためと言うのかい。君たちは神を有難く思うか、思わぬか、どうじゃな。それは何のためかと言え、この美しい町の姿、向うの川の流れ、その回りの山、頭上の空などの存在のためなんじゃ。しかも それにもまして、それらに取り囲^まかれた人間男女、子供の存在のためなんじゃ。そのためにこそ、神はそれらを創られたのじゃ。

とすれば、それらを一体どう受け止めるべきかね。われわれはこれを見逃したり軽視したりしてよいものか。それとも、それを素晴らしいものとして、心に留めて置くべきものか。無論、後者であると言いたいじゃ。そしてわれわれはこれらを結果など構わずに、どしどしとありのままに画くべきなんじゃ。なのに、なぜ拙者の言う通りに人はしないのかね。神の創られたものは何でも画け、そしてありのままに画け。ありのままに画かないと罰があたるぞ。

すると誰かが言うかもしれん。『神の御業はもう終わった。自然は完全だ。それを再現することなんか出来るこっちゃない。それは無用のことだ。そんなことをするのは、自然のぶちこわしだ』と。そんな横槍はやめてくれ。

なぜかと言え、君たちお解りかな。われわれ人間が百遍見逃したり、見ようとしなかったものは、われわれがそれらが画かれているのを見ると、われわれは、初めて、それらを愛することになるんじゃ。われわれがそうなるように神によって創られているんだ。だから、それらは画かれることが一番大切なんだ。それが人間にとって何よりも重要なことなんだ。芸術は こうすることによって続けられて行くものなんだ。

神は、人間が各自の才能を他人の用に供して互に助け合うようになさったのだ。こんなわけなんじゃが、君（撃^撃手の隊長^{隊長}）は君の手下の紋り首になりそうな顔に気づいたことがあるかい。もし気づいたことがなければ、チョーク一本あれば、すぐに君が納得が

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「フラ・リポ・リビ」

行くように画いて進めることができるがな。いやもっと高尚なるものを画けば、一層君に納得してもらえるがなあ。そうなれば牧師の説教壇を奪って、拙者が君たちに神を説くことになるぜ。

拙者が創始したこの芸術を、拙者よりあとの者が完成し^㉔、拙者が何もせずに死んで行くのを思えば気が狂いそうじゃ^㉕。

要するに、この世はわれわれにとっては決して汚れたものじゃない。また虚ろなものじゃない。うんと意味があり、よいものじゃ。こんなわけで、この世の意味づけをすることが拙者の飯であり、酒なんじゃ。これが拙者の生き甲斐というものかな^㉖」

と。リポは自らの血の気の多い^㉗寧ろ動物的な人間^㉘であると言っているが、神の創られたままの姿の美と驚異と力を真に理解し、神の存在とその偉大性を決して無視しない人間であった。ところで、今、警手に掴かまるという破目になったが、自らがただの売僧でなく、信仰もあり、懺悔もしていることを示し、且つ画家として傑作を世に残したいので、逮捕だけは許してもらいたいという苦衷を述べて、警手の同情を得ようと言う。このたびの乱行は、丁度、人が飲みつけない酒に酔ったように、外に出つけないリポは夜風に当って、つい気が立ったのだ。教会でも、リポのことはよく承知してくれている。事を荒立てないようにして欲しい。そしてその罪滅しに聖アンブロジオ教会〈Saint Ambrogio's〉に献ずる一つの絵を画いてみようと思っていると、ユーモラスをまじえて次のように言うのである。

「聞き給え、拙者は罪滅しをしようと思って、一つの絵を画くことを考えている。それは半年待ってもらいたい。半年経って聖アンブロジオ教会に行き給え。するとそこにそれが見つかるだろう。その絵は拙者に一筆揮って欲しいと願っている尼さん達のために画くのだが^㉙」

と。そしてこれから画く絵の説明を詳しく述べて行く。

「真ん中に神と幼児を抱いた聖母様。

周りには茂った木の葉や花の群のように天使達が集っている。

かの女らは白百合の花を持ち、着飾り、その上、真夏の日に教会にお祈りに行く貴婦人が香菖蒲の根を磨り砕いて粉にした香料をパッパッとふりかけたように芳香を放っている。

また、フロレンスの人々を救われた聖ヨハネ〈Saint John〉、修道者達の名を記録に止め、長い寿命を与えられた聖アンブローズ〈Saint Ambrose〉、ウズ〈Uz〉の人ヨブ〈John〉^㉚。

さて、これらの人達が熱心に祈りを捧げているところへ、皆の人達が予期もしないときに、暗い階段を昇って眩しい光の中へ来る人のように、讃美歌の中へ、人々の話の弾む中へ、隅っこから現われて這入り込むのが拙僧リポさ^㉛。

拙者はまごつき、身動きもならず、また目が眩む。拙者も矢張り人間だもんで。ところで、拙者がそこで見、また聞く光景は何たる眩しい光景か。拙者は尻込みする。

古るぼけた平の修道士の着るサージ服と腰にまわした縄帯の僧服で迷い込み、天父の御前、聖なる方々の面前で見つかったのが、この拙僧^㉜。

どこか穴でもなかろうか、逃げ込む隅っことはなかろうかと思う瞬間、優しい女の天使の忍び足のような足音が近づき^㉝、柔い手を差し伸べ、居並ぶ天使達に申される。

「そんなに早くお逃げになってはいけません。いいえ、神さまはあなたとは全く違っ

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「フラ・リポ・リピ」

ておいででございますけれども、結局は、神さまが御工夫の挙げ句、あなたをお創りなされたのです。

その聖ヨハネさまも、あの駱駝の毛の絵筆をお使いになっても、御自身でお画きになることができますようか。

絵画にかけては誰も皆、あなたリポのところへ参ります。ここにかれ業を終えりと誌してございます』と。

そこで皆が微笑む。拙者は顔を真赤にする。そして丁度、戸を閉めきって、君が陽気に盲遊びをしている最中、ひょっこり亭主が頭に湯気をたてて踏み込んで来たとき、女房の裾がまくりあげられている時のさま同様、天使さまの裾がまくれ 上げられる。拙者はそのふくよかな天使さまの裾の翼の下をかいぐりぬけて行く⁵⁶。

こうして、うしろの安全な腰掛へ、^{ほうほう}這々の体で逃げて行く。

しかし、さきに隅っこで拙者に、優しい言葉をかけて下った小さい百合の花のような天使さまの手は離さない。その天使さまは院長の姪ごにそっくり、聖ルシー <Saint Lucy>⁵⁷ と呼びたいな。

これでわしも無事に救われ、教会にも立派な絵ができる。半年経ったら見に行きなされ⁵⁸」

と。これはリポが半年さきに画く絵の予定を言ったことになっているが、実は(1)で述べた「聖母戴冠」の説明となっている。「聖母戴冠」の作品は、ルネサンス精神の、地上的、現世的歓喜を神の贈物として無視しないリポが神秘的な聖母戴冠の儀式を、ただ壮嚴な、崇高な、超現実的な精神で画くのではなく、人間的な、血も肉もある生々しい感情で書き、天上的なものでも地上的に、生命的に画くりポの芸術的信念を表わしたものである。キングもリポの芸術について「フロレンスの歓楽街と僧院は、芸術的な力と宗教的な力という相反する力を表現し、この二つの力の一致することをリポが強く求めていることは明らかである⁵⁹」と言っている。禁欲主義者が、浮世を汚れたもの、^{うつろ}虚なものとして、骨と皮の聖者の絵を画くことを主張したに対し、リポがこの世は汚れたものでもなく、虚ろなものでもなく充分に意味のあるものであると言って、この世の意味づけを、かれの絵画の目的とし、骨と皮の絵画に肉をつけ、血をそそぎ、生き生きとしたものに画くのがかれの芸術であった。

(5) 結 び

リポの人生の生き方、芸術の見方はただにリポのみならず当時のフロレンスの人々の人生の生き方であり、芸術の見方であった。そして、これは、また、ルネサンス以後近代にかけての人間性に覚めたすべての人間の姿である。ここにブラウニングはリポなる具体的人間を把えて、これを普遍化するため、これをこの詩の表題とし、人間性に覚めたすべての人間の人間らしい真の姿を描き、しかもこれを巧みな dramatic monologue という秀れた芸術的手法を用い、この傑作“Fra Lippo Lippi”なる劇的独白詩を創り上げたのである。

〔註〕

- ① 本名は Tommaso Guidi と言い、中世絵画の軌範を脱して遠近法の活用や色調の柔味を取入れたことによって近代絵画の鼻祖とせられた鬼才で二十七、八才で夭折した。Michelangelo も

Raphael もその絵画に負うところが多かった。絵画に熱中するあまり他のことを省みなかったために Hulking Tom(のっそりのトム) と綽名された。これをイタリア語で Massaccio と言ったのである。

- ② 現在フロレンスの Academy of Fine Arts に蔵されている。
- ③ コシモ・デ・メジチ家は十五世紀から十六世紀にかけてのフロレンスの名家で文学芸術の保護に貢献した。
- ④ Robert Browning: Fra Lippo Lippi ll. 12-18
- ⑤ *ibid.*, ll. 27-30
- ⑥ Roma J. King: The Bow and the Lyre, p. 32
- ⑦ Robert Browning: Fra Lippo Lippi ll. 24-43
- ⑧ *ibid.*, ll. 112-126
- ⑨ *ibid.*, ll. 91-96
- ⑩ *ibid.*, ll. 110-111

これは Stornello と呼ぶイタリアの俗謡を真似た小唄である。普通の場合 Stornello は一人が五音節の初行の終りに花の名をあげて、それを韻語として題を出すと相手が十一音節の対句になっている恋歌をそれに添えるのである。㉔の引用句にこの種の小唄が含まれ、㉔及び㉕もこの種の小唄である。

- ⑪ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, ll. 129-134
- ⑫ *ibid.*, ll. 1-11
- ⑬ James Fortheringham: Studies in the Poetry of Robert Browning, p. 337
- ⑭ Roma J. King: The Bow and the Lyre, p. 33
- ⑮ 肉体的生活を欲しながら、それを否定する偽善者の態度をとること。
- ⑯ 禁欲生活を強いられて不満を持ちながらも表面的には禁欲生活に極めて満足しているかの態度をとること。
- ⑰ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, ll. 261-275
- ⑱ *ibid.*, ll. 73-74
- ⑲ Jerome は禁欲苦行をした人として知られている。Jerome の禁欲主義と Lippo の快楽主義は極端な対照をなしているが、現在 Lippo の画いた “St. Jerome” の名画がフロレンスの Academy of Fine Arts にある。
- ㉔ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, ll. 246-251
- ㉕ *ibid.*, ll. 53-56
- ㉖ *ibid.*, ll. 60-61
- ㉗ 永い間監禁生活を強いられていたリポが歓楽街に出たこと。
- ㉘ リポが歓楽の巷を遊び廻ったこと。
- ㉙ コシモ公或は修道院長をさす。
- ㉚ 枯草は馬の好きな食糧。リポがコシモ公にも修道院長にも遊び方など教えられもせぬのに歓楽街で思う存分に遊んだこと。
- ㉛ 歓楽のこと。
- ㉜ 虚偽の禁欲生活が人間のなすべき生活か、血も肉もある楽しみの生き生きとした生活が真に人の送るべき生活か、どちらかに永久に決めて欲しい、それは決っている血と肉の楽しみの生活であるとの意。
- ㉝ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, ll. 254-260
- ㉞ *ibid.*, ll. 68-69
- ㉟ *ibid.*, ll. 145-154
- ㊱ *ibid.*, ll. 158-162

- ㉓ 瘦せた涸らびた血の気のない聖者の絵のこと。
- ㉔ 人間は死ぬと焼かれて煙となって消えるからかく言ったのである。
- ㉕ 煙も火も消えることは同じではないかと言って相手が口を切ろうとしているのを察してかく言ったのである。
- ㉖ イタリア美術復興の巨星と仰がれ、彫刻に、建築に往くとして可ならざるなく、フロレンスの Duomo（大教会堂）の Campanile（鐘塔）はその傑作である。中世に於ける写實的絵画の鼻祖と見なされている。しかし肉体美を描出しなかったため、ここでは魂のみを画いた画家としてあげられたのである。
- ㉗ Herodias は普通には Salome の母の名であるが、中世の伝説では Salome を Herodias と言ったところから、旧教国ではかく言っている。しかしここでは Salome のことを指していることは確かである。
- ㉘ Robert Browning: Fra Lippo Lippi ll. 175-198
- ㉙ 宗教画の場合、人間を画きながら、はっきりと肉体の美を画かず、しかも魂の美を画くとしながら、それも表現できず曖昧な表現となっていること。
- ㉚ 完全な肉体のこと。
- ㉛ 魂の美のこと。
- ㉜ 宇宙全体から見れば、万物は小さな存在にすぎないこと。
- ㉝ 肉体の腕、脚などがそれぞれの働きの縄張り争いをせず、自らの存在を忘れ、ただ脳の命じるままに身体全体のために動くこと。Abt Voglerの楽音が楽堂建設のために、それぞれの部署にあって働いたようにすること。拙著「ブラウニング鑑賞」第五章参照のこと。
- ㉞ 肉体と魂が互に助け合って人間の進歩を計ること。
- ㉟ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, ll. 199-220
- ㊱ この詩の 270 行から 280 行に於いて、リポの立てた画風を慕う Guidi (Massaccio) が現われ、明星のように輝くのが見えると言って、自らの流派の自信を示している。
- ㊲ 院長はじめ皆のものが、リポに反対し、相変らず宗教画を画かせようとすることに對する苛立ちのリポが今、歓楽を追うに到ったのもこの苛立ちの一つであるとの意。
- ㊳ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, ll. 283-315
- ㊴ ㉔を参照のこと。
- ㊵ この詩の80行で“Come, what am I a beast for?”と言っている。
- ㊶ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, l l. 843-847
- ㊷ 旧約聖書の中で悪魔の試練に堪え、堅忍の典型と言われるウズの生れの人。
- ㊸ 当時はまだ画家がその作品に署名することがなかったため自分の似顔を画中に画く習慣があり、この絵にもリポの似顔が隅っこに画いてあること。
- ㊹ 天国に行かれまいと思っている自分が誤って、天父の御前、マドンナ戴冠の盛儀を拝するなど思い設けぬことの意。
- ㊺ 画中にあって逃げることなく、リポと相対し、リポの手をとり、かれを引きとめている天使の姿の少女。これの model となったのが㉔で述べる Lucrezia という少女で、リポの衣鉢を伝えた Fra Filippino Lippi の母となった女性と考えられている。
- ㊻ 女房が裾をまくり上げている所へ、亭主が頭に湯気を立てて入って来るとき、相手の男がその裾の下をくぐって逃げて行くようにと言って、リポがいかに女好きの性格であることを表わしている。
- ㊼ リポは Prato に住んでいたとき、Santa Margherite の尼寺の依頼で、祭壇の絵を画くことになり、そのとき Lucrezia Buti と呼ぶ若い尼を見初めて、頼んで Madonna の model とし、後にこの尼を連れ出し同棲し、かれらの間に生れた男の子が Fra Filippino Lippi であった。そこで院長の姪の Lucy と似ているところから、この画中の救主の少女 Lucrezia を救い神と思

ロバート・ブラウニングの劇的独白詩「フラ・リポ・リピ」

いたいとの意味で Saint Lucy と言ったのである。

⑤⑧ Robert Browning: Fra Lippo Lippi, ll. 348-389

⑤⑨ Roma J. King: The Bow and the Lyre, p. 33

〔参 考 文 献〕

- ① Roma J. King: The Bow and the Lyre
- ② James Fortheringham: Studies in the Poetry of Robert Browning
- ③ Mrs. Sutherland Orr: A Handbook to the Works of Robert Browning
- ④ Edward Berdoe: The Browning Cyclopaedia
- ⑤ Kenji Ishida and Rinshiro Ishikawa: Men and Women by Robert Browning
- ⑥ 大庭千尋：ブラウニング・男と女